

# OPEN ACCOUNT

(オープン アカウント)

アジア開発銀行福岡 NGO フォーラム ニュースレター  
Vol.2 February 1999

## -環境アセスメントについて-

渡辺和行

今年の6月から環境アセスメント(以下アセスという)が法律として実施される。ニュースや新聞でたまにお目にかかるこのアセスとは、開発事業を行なうとき事前に環境に与える影響を予測し、大丈夫かどうかを判断し必要な対策を行なうためのものといえる。1972(昭和42)年から行政指導という形でアセスは行われてきたが、諫早湾干拓など環境に影響がある事業が実施されている様子を見ると環境面のチェックというより事業を実施するための免罪符としての役割が強いように思われる。

では、今回の法制化で今までとどう変わるのでしょうか。アセスの実施の仕方について、これまでの制度では環境面でのチェックが終わった後に住民や知事・市町村長の意見が求められ、アセス書類(評価書)がつくられた。そして、その評価書をもとに事業案に許認可を与えるかどうか審査されるという流れであった。これに対し、今回の法制化では、これまでのアセスの始めの部分と終わりの部分に新しく手続きが加わることになる。始めの部分では、今までアセスを行なわなかった小さな事業でもアセスを行なうかどうかの審査がなされ、そして行なう場合、どのように環境面でチェックを行なうかの方法についても住民や知事・市町村長の意見が求められるようになった。そして、終わりの部分では、評価書作成の後、環境庁長官の意見が出された後で許認可がなされるかどうか決まるようになった。さらに、事業が着手された後にも調査が行なわれるようになった。

以上のように、今までと比べ良いアセスになるが、まだまだ課題は残る。4点あるが、1つは、情報公開制度の拡充である。アセスが行われても情報が公開されてなければ住民は行政や事業者と対等になれないからである。2つ目は、個別の事業案のもととなる総合計画(例えば全国総合開発計画)など上位計画の段階からアセスを行なうことである。そうすれば、各地の不要なダム計画など無駄な事業案が出てくることも少なくなる。3つ目は、環境面のみならず社会経済面のチェックも含めた総合評価をアセスで行なうことである。それにより今までアセスを嫌がっていた事業者も少しは積極的になり、市民の側でも関心を持つ人が増えると思う。4つ目は、事業案に対する対策をつくり比較しチェックを行なう代替案検討を行なうことである。アセス先進国アメリカでは、4つの代替案を検討することが義務化されているという。この代替案検討により選択肢が増え、各案の利点を盛り込んだ案が期待できる。

しかし何とんでも市民の盛り上がりが必要だと思う。多くの人が開発に対しアセスを使い積極的に参加することで遅れているといわれる日本の民主主義も根づくと思う。また、その経験は、ADBの融資など海外援助の評価を行なうときにも使えるものだとも思う。

## ADB福岡NGOフォーラム設立総会のご案内

ADB総会福岡NGOフォーラムは、このたびADB福岡NGOフォーラムとして再スタートすることになりました。

つきましては、下記の通り設立総会を開催いたします。

総会に引き続き、熱帯林行動ネットワークの南里隆宏さんや当フォーラム代表・吾郷健二さんによる講演会を予定しています。

新フォーラム誕生の会に、多数のみなさまがご参加くださいますようお願いいたします。

### 記

日時：2月27日（土）17時より

場所：クローバープラザ（JR春日駅隣、春日市原町3-1-7）507研修室

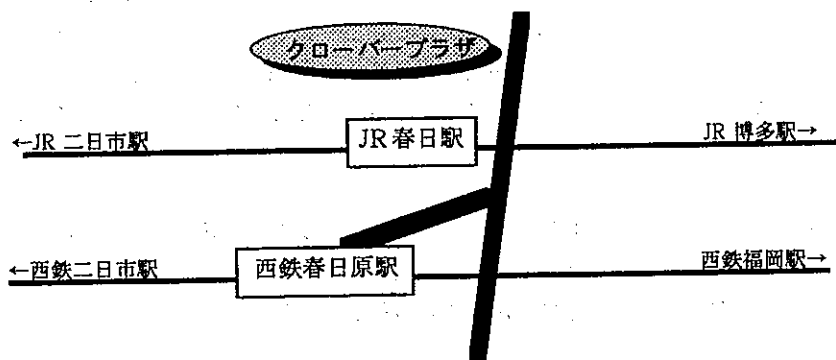
内容： ADB福岡NGOフォーラム設立総会

記念講演・ADBに対する世界のNGO活動 南里 隆宏さん（熱帯林行動ネットワーク）

- ・世界銀行と開発戦略 吾郷健二さん（ADB福岡NGOフォーラム代表、西南学院大学教授）

※お問い合わせは福岡NPO共同事務所「びおとーぶ」内

ADB福岡NGOフォーラム（電話・FAX：092-526-9620）へ



## 第一回勉強会 アジア開発銀行と NGO

講師：南里隆宏さん

報告者：神崎尚美

ADB—アジア開発銀行。この言葉に皆さんはどんな思いを抱かれますか。「何かあったな、そういうの」と思われた方、「久しぶりに聞いたな、その言葉」と思われた方、それぞれ様々な思いをお持ちのことと思います。私個人としてすぐに思い浮かぶことは一昨年のアジア開発銀行福岡総会の際「アジア開発銀行総会福岡 NGO フォーラム」を通して出会った多くの方の顔です。笑顔があったり、涙があったり、皆で歌を歌ったり、ダンスをしたり。しかし、決して一日中そういうことばかりしていたのではなくて、NGOの皆さんも昼間はピシッとした顔になって会議や活動に出かけて行きました。今回講師として来ていただいた南里さんと出会ったのもこのときでした。

今回、南里さんにはADBとは一体どんな機関なのか、ADBが融資をしたり、技術支援をして行っている開発援助の裏側にどんな問題が潜んでいるのか、NGOはそれをどう捉え、そこにどのように関わっているのかというようなこととお話ししていただきました。

「一体誰のための援助なのか。本来最も恩恵を被るはずの貧困者層へ本当に利益がもたらされているのか。政府や多国籍企業ではなく、こういう人たちが開発の在り方を決めるべきだ。」と南里さん。日本はADB最大の出資国です。それらのお金は私たちの税金や銀行預金、郵便貯金を通して購入されるADB債や年金で賄われているのです。そして、環境への悪影響の恐れや、住民への被害の恐れを抱えたまま次々に行われる開発。結局、気づかない内に私たちはその片棒を担いでいるのです。ADBはこの様な問題を配慮して、政策や制度を持ってはいるのですが、長い目で見たときそれらは何の役にも立たないものである場合も多いのだそうです。プロジェクト終了後も3年から4年は報告書を出したりしているのですが、その後のフォローは何もありません。これに対してADB側は「ADBは借入国政府からの要請に基づいて出資をしているのであって、そういうことにはその国の政府が対応すべきである。」との見方をしています。本当にそれでいいのでしょうか。

昨年の夏、私はラオスへ行く機会がありました。ラオスは豊かな川と森の国でした。人々は心優しく、市場で売ってあるものは山菜を中心とした山のもの。私が訪れた町はどこもメコン川やその支流沿いにありました。時にはゆったりと、そして堂々としたメコンの流れを見ながら1日を過ごしました。この旅で私は川の持つパワーを感じました。とにかく心が安らぐのです。川沿いを行けば、網で魚を捕まえる人、川辺で水浴びをする子どもたち、渡し船を仕事にしている人に会います。この人たちにとっては、大切な生活の場なのです。今メコン川にたくさんの開発プロジェクトが持ち上がっています。これは全世界で行われようとしているプロジェクトのほんの一握りでしかありません。私はこの川が「死の川」にならないよう、そしてその他のプロジェクトについても、今何かをしなければ…と改めて思いました。



※ADB 福岡 NGO フォーラムでは、上記のような勉強会を継続的に開催していく予定です。とっても難しい国際金融について少しづつ勉強していきませんか？ 日程や内容などはニュースレターにもお知らせしますが、ADB 福岡 NGO フォーラムに直接お尋ね下さい。最新の情報をお伝えします。

## ADB の虚実と現実 (1)

熱帯林行動ネットワーク 南里 隆宏

ADB はどんな問題を抱えているか？

ADB は、97年に第30回目の記念総会を福岡で行った際、当時の佐藤総裁は、近年のアジア諸国の著しい経済成長を「アジアの出現」と題し、過去30年のADBの実績を自賛した。設立以来「経済成長を継続してゆくこと」がアジアの貧困削減に繋がるとしてきたADBは、当時環境／社会面への配慮の改善や一連の組織／政策／業務改革に一定の目途がついたこともあり、アジア諸国の順調な経済成長と併せて、得意の絶頂にあったと言える。

一方NGOは、ADBの30年を別の視点から評価していた。というのは、実際にADBのプロジェクトが行われる現場からは、未だに地域の環境が破壊され、人々の生活に悪影響が及ぼされているなどという声が多々挙がっていたからである。それでは、「改革」が進んでいるとされるADBの業務活動に、こうした「現実とのギャップ」が生じるのは、どのような問題があるからと言えるのだろうか？

まず、ADBが90年代初頭から着手してきた一連の政策／組織／業務改革に関して述べると、確かに以前に比べ環境／社会配慮の在り方や情報公開等の面で、改善が見られていることは事実である。しかし、そこに全く問題がないとは言いきれず、その具体例として主に次の3点が挙げられる。まず最初の一点目は、政策やシステムが定められても、それらがきちんと機能していなければ、殆ど意味がないということである。残念ながら、現場にいる人達の声の聞いてみると、ADBが言っていることと、実際に行っていることには、未だかなりのギャップがあると判断せざるを得ない。次に挙げられる点は、政策やシステム自体の内容に未だ問題があるということであり、後で詳しく述べるが、それらは必ずしもNGOから見ても満足の行くものではないということである。最後に挙げられることは、「改革」の進行状況に関し、ADBとNGOの認識度には大きな隔たりがあるということである。特にNGOからすれば、「もう充分良くなった」とするADBに対し、それらの改革は「やっと始まった」という認識でしかない。つまり、最初の一步を踏み出したことは評価に値すると言えるものの、重要であることは、今後いかにさらなる改革が行われてゆくかということである。

根本的な開発の在り方自体が全く変わっていないということも問題であると言える。ADBが環境・社会面にも配慮するとしつつも、実際の業務活動が旧来の構図のままであるということはその良い例である。つまり、「国家発展の為」という名目の下に大規模インフラプロジェクトを推進し、そのことによって海外からの投資を呼び込み、経済成長を達成することによって貧困を削減するという手法は、過去の多くの事例が示すように、本来開発の対象とされる貧困層の人々に対し、必ずしも直接その恩恵が及ぼされる訳ではない。むしろ、そうした人々が犠牲になることによって、まず一部の富裕層や多国籍企業が潤うことになる。海外からの積極的な投資を奨励し、輸出志向型の産業構造を構築することによって、高度成長を維持して行けば、多少の犠牲はあっても、必然的に中流階級が増え、貧困削減にも繋がってゆくということであるが、実際には貧富の格差が増大し、「開発難民」を生み出すという一面も見逃せない。NGOからすれば、アジア諸国がかつて日本が歩んだ道をそのまま踏襲することは妥当と考えず、果たして経済成長を達成することが本当に貧困を削減することに繋がるのか疑問視している。少なくとも、誰かの犠牲を伴う「上からの開発」ではなく、本来の受益者の意向が尊重された形で開発が進められることが最低限必要なはずである。つまり、本来の受益者であるべき人々に恩恵が及ぼされないのであれば、援助とは言いつつも、「一体誰の為の開発なのか？」と考えざる得



ない。また、考えようによっては、根本的な開発の在り方自体が全く変わっていないとすれば、いわゆる ADB の言う改革自体、小手先のものに過ぎないと判断することも出来る。

このように、根本的な開発の在り方から政策／組織／業務レベルまで、ADB と NGO の考え方に多くの相違点があることが明らかになったが、絶えずそれらの問題を巡って、両者の間で様々な議論が交わされてきたことは事実である。しかし、97 年半ばにタイで起こった通貨危機を境に、状況が多少変わって来たと言える。タイを皮切りに韓国や他の東南アジア諸国へ飛び火した「経済危機」は、何よりも ADB を初め多くの政府や援助機関が推進してきた開発モデルが挫折したことを示す何よりの証拠となった。こうした開発手法の見直しを望む必要性が高まっていることに加え、資金供与国の「援助疲れ」から公的資金源が減少していることなどを考慮すると、21 世紀を間近に控え、ADB は現在岐路にあると言っても過言ではない。ADB が今後アジア・太平洋地域でどのような役割を果たして行く必要があるのか、今まさに検討される必要があると言えよう。そして、その為には少なくとも ADB のどこが改善されるべきなのか、以下いくつか具体的なポイントを基に考えて行くことにする。

(以下次号に続く)

ADB 福岡 NGO フォーラム 第 2 回 春のエコ・ツアー in KUMAMOTO  
【水俣・川辺川】

“水をめぐる旅～過去から未来への流れを見つける～”

日 時：平成 11 年 3 月 21 日(日)～22 日(祝)

参加費：12,000 円(交通費、宿泊費、夕食代込み)

※詳しくは、別添のチラシをごらんください。

昨年 3 月にダニエル・ピアードさんをお招きして行った“諫早スタディツアー”に引き続き、“水”をテーマにした春のエコ・ツアーを開催します。

水俣病を通して“もやい直し=再生”をはかる環境都市“水俣”と第三国で現在も引き起こされる“水俣病”。

鮎の群れ泳ぐ日本一の清流“川辺川”と“子守唄の里・五木村”。その川に何のため、誰のためのダムなのか不明のまま本体着工されようとしているの“川辺川ダム”。

過去から現在へと流れる“時の川”。その流れは山里から海へ、そしてアジアの国々へとつながっています。みなさんもその流れを一緒に見つけにいきませんか？

春のうららかな風に乗って・・・

(ひとみ記)

## 考える糧～Food for Thought

### その1：反対を考える

——土井 利幸 (どい・としゆき)

世の中を少しでも変えたいのなら、社会通念の反対を考える必要があると思う。そこで、シューマッハは、「スモール・イズ・ビューティフル」と言い、ライヒは「金がない人がなぜ泥棒をしたかではなく、金のない人がなぜ泥棒しないかこそ重要である」と言った。

NGOは、困っている人たちや損をしている人たちに思いを馳せるのが得意である。それもあってか、世間の評価も高くなってきている。しかし、困っていない人たちや、得をしている人たちのことを考えるのは、まだまだ苦手だと思う。

ある課題に取り組む時に、誰が損をしているかを考えるのと同じぐらいの時間やエネルギーを使って、誰が得をしているのかを考えるようであればいけない。スラムに住む人たちの生活改善を考えるのと同じ誠実さをもって、スラムが存在することで得をする人間たちの狡猾さを見抜かなければいけない。貧困層をどうしようかと知恵をしぼることも大切だが、てごわい富裕層にどう対処するかもしっかりと考えなければいけない。

## ●今後のADB福岡NGOフォーラムの予定です●

### ■ADB福岡NGOフォーラム準備会

日時：2月12日(金)午後7時から  
場所：福岡NPO共同事務所「びおと一ぶ」

### ■エコバスツアー事前学習会～川辺川ダムについて～

日時：2月19日(金)午後7時から  
講師：高木英行さん(川辺川を守る福岡の会)  
場所：福岡NPO共同事務所「びおと一ぶ」

### ■ADB福岡NGOフォーラム総会

日時：2月27日(土)午後5時から  
場所：クローバープラザ(JR春日駅隣)507会議室  
総会終了後、特別講演「ADBに対する世界のNGO活動」南里隆宏さん  
「世界銀行と開発戦略」吾郷健二さん

### ■第2回エコバスツアー「水をめぐる旅」～水俣、川辺川～

日時：3月21日(日)～22日(月、祝)  
集合場所：福岡NPO共同事務所「びおと一ぶ」8時30分  
参加費：12,000円

■その他、谷さん(アジアと水俣を結ぶ会)の学習会も予定しています。

### Open Account とは

英語の「アカウント」には、「銀行口座」と「説明」という二つの意味があります。「説明」の意味の「アカウント」は、最近よく聞かれる「アカウントビリティ」(説明責任)という用語の一部でもあります。「オープン・アカウント」とは、ADBが銀行であることから「口座を開く」という意味と、「ADBの活動を市民に対して分かりやすく説明し、情報の公開を求めていく」という意味がこめられている「かけ言葉」です。『オープン・アカウント』がADBなどの国際金融機関やODAの透明性が高める場になればと願ってやみません。

ADB福岡NGOフォーラムでは総会后、会員を募集します。ぜひ会員として活動にご参加下さい。詳しくはオープンアカウント次号にて

### Open Account 1999年2月号 Vol.2

発行：ADB福岡NGOフォーラム  
住所 〒815-0071 福岡市南区平和1-6-1  
福岡NPO共同事務所「びおと一ぶ」内  
TEL&FAX 092-526-9620  
編集責任者：今村 和彦  
e-mail kazz@ga2.so-nct.nc.jp